

吉澤義則編

未刊國文古註釋大系

第十一卷

清
文
堂

未刊国文古註釈大系（全十八卷）第十一卷

昭和十三年六月二十日
昭和四十三年十月五日
初版発行
複刻版発行

編纂者 吉澤義則

発行者 前田勝雄

製版者 京都市下京区柳馬場四条通下
光綾写真製版株式会社

能登英夫

印刷者 京都市南区東九条南石田町一
朝陽堂印刷株式会社

高橋清二

製本者 大阪市天王寺区勝山通一ノ一〇
倉橋製本株式会社

倉橋重男

発行所 大阪市南区二ツ井戸町十五
清文堂出版株式会社

振替 大阪六二三八
電話 四六二六五（代）
郵便番号 五四二

未刊国文古註釈大系 第十一卷 目次

源氏物語釈

一

原中最秘鈔

二九

源氏物語古註

八九

源氏一滴集

一一三

種玉篇次抄

三三五

源氏物語不審抄出

三四七

花屋抄

三八三

源氏物語蜀山鈔

四四九

源氏物語ひとりごち

四六七

源氏物語釋

一冊

藤原伊行著

源氏物語釋開題

本書一卷は、藤原伊行の著である。

本書は、「源氏釋」「源氏あらはし」「あらはかし」、「伊行朝臣釋」「伊行釋」、又「伊行朝臣勘」「伊行勘」と稱せられてゐる。但し「奥入」と呼ばれてゐるのは誤のやうである。

本書は、源氏物語註釋の最初の本文を數行宛あげて、その故事出典や引歌を載せてある。定家の「奥入」の基礎となつた點や、定家以前の本文を仄かに知り得る點に於て貴重である。

本書の傳本中、宮内省圖書寮尊藏本は明石の卷までの殘缺本であり、前田侯爵家藏本は傳二條爲定筆で一部分の缺脱がある外は完本である。併し今は圖書寮本を本大系に收めて、前田家本によつて補足せられる日を待つこ

と、した。

本書の著者、藤原伊行は、行成六世の孫で、行成はもとより、祖父伊房も、父定信も、共に能書家として聞えてゐる。殊に伊房は、河内本の校勘に用ひられたといふ源氏八本中の「二條帥伊房本」の主である。伊行は、入木道に於ては息女の爲に記した「夜鶴庭訓抄」の著作があり、本朝書籍目錄外錄には「一切經一筆ニカキシ人也」とあり、伊勢物語闕疑抄には、建禮門院右京大夫の父で、歌道にも隨分名を稱せられたとある。なほ、群書一覽等の記す處によると、源氏物語「夢の浮橋」の卷に續くものとして、「山路の露」一卷を試作した人とせられてゐる。高倉帝頃まで健在してゐたことは、彼の夜鶴庭訓抄によつて知ることが出来る。

源氏物語釋

あまたの更衣たちのなかにおほえあるによりて世人このこと
をいとしもなきことにおもひてもろこしにもかゝること
にこそよはみたれあしきこともいてくれといふところ
もろこしに玄宗皇帝と申みかとおはしけり楊玄琰といふ
人のむすめ楊貴妃といふさまあしき程におほしめしてよ
のまつりこともしたまはず楊貴妃のせうとに楊國忠とい
ふ人に世のまつりことをまかせてすて^きせ給によのみた
れてなけきとすときに安祿山といふ人のいかりをなして
いくさをこしてみかとのみゆきしたまふみち馬鬼とい
ふところにて楊貴妃ならひに楊國忠らをとりにてころしつ
玄宗みやこそさりとて蜀といふところへおはしぬそのみち
にて陳玄禮といふもの楊國忠かまつりことをしりて國を
みたりぬるゆへなり又玄宗にぐしたてまつるつはもの玄
禮とともに貴妃を申うけてゝらのうちにしてくひりころ
ししことなり

更衣うせ給てのち物のあはれしりたるうゑ人などとはなくて
そとはかゝれはにやといふは

ある時はありのすきみにゝくかりきなくてそ人は戀しか
りける

御かと野わきしてもこのゝろはそきたくれゆけいの命婦を
みやすところのはゝのもとへつかはしてはかなき御あそひ
にもことにふれてはへ／＼しく人にはにさりし御氣はひた
ちのおもかけにたゝせ給やみのうつゝにはなをとりにける
とあるところ

むはたまのやみのうつゝは^{タイ本}さやかなるゆめにいくらもま
さらさりけり

命婦かしこにいきてかとひきいるゝ程にくさもしけくのあ
きにそゝあれたるを月のかけはかりそやえむくらにもさは
らすさし入たるとあるは

やえむくらしけるやとのさひしきに人こそみえねあき
はきにけり

露けきむすふとよみてつかはしたるに更衣の母えみはて給
はていのちなかさいとつらくおもひ給へらるゝにまつ

思はんにとさへはつかしくとあるは

いかにしてありとしられしたかさこのまつと思はんこと
もはつかし

御息所のはゝ命婦にあひてこゝろのやみになといふは
人のをやのこゝろはやみにあらねともこをおもふみちに
まとひぬるかな

御息所のはゝ命婦のをくり物にかの御かたみのさうそくひ
とくたりをし給つるをやかてう○に御らんせさするになき
人たつねえたるしるしのかんさしならばとてたまの行ゑお
とよまれたると又あさゆふのことくさにはねをならへえた
をかはさんと契しらせ給とあるは

件の玄宗なけきかなしみ給に方士といふ人きたりて貴妃
のおはし所をたつねんといひて雲にのほり地にいりてみ
れともあはすはかへらさるに蓬萊にゆきてあひたてまつ
りぬ玄宗にこのよし申さんさらにしんせられししるしを
給はらんといふにたまのかんさしをとりにてこれをまいら
せたらはしんせられなんといふにかさしはよにある物な
りしるしとするにたらず人にしらせすしてともにの給へ

ることやあるといふに貴妃むかし七月七日長生殿にして
天にあらはねかはくははねをならふるとりとならん地に
あらはねかはくは枝をつらぬる木とならんと契給へりき
といふこれを方士かへりまいりていかてすむらんあさち
ふのやとゝよみて

このころ亭子ていしのみかとの御てつからかき給て伊勢と貫之と
に山とことはつけさせ給へる長恨歌の御を御らんしつと
もし火をかきあけつくしておはしますといふは

夕ユフ殿螢飛思ヲ悄然セ 秋燈挑トリ 盡トモシ 未モ能眠シラ
といふ長恨歌の文也これは戀のこゝろ也

このゑつかさのとのる申のこゑきこゆるはうしになるへし
人めをおほしてよるのをとゝにいらせ給ても露まところまれ
たまふことなしあしたにおきさせ給てあくるもしらすとあ
るは

たますたれたれのイあくるもしらすねしものをゆめにみえすめみしイとな
けきつるかな

源氏のわらはにてこまのくにの人にみえ給所に宇多院の御
いさめありけりといふは實平の遺誠にみかとは異國の人に

はみえ給ましとあるところとなり

二 はき木

さるはいといたふよをまめた給ける程かたのき少將とわ
らはれ給けんかしといふはたつぬへし

あふひのちゑの御もとなり
おほいとのにたえくまかりいて給しのふのみたれやとう

たかいきこゆるところ

むさしのきわかむらさきのすりころもしのふのみたれか

きりしられす

あまよのかみ
あまよのしなさためるところにせはきいゑのあるしとすへ

き人ひとりをおもひめくらすにたらはてあしかりぬへきた
いしともなんかたくおほかるとあればあふさきさにて
とあるは

れはイ本
しかりと
しかありとすればかきりかくすればあないひしらすあ

ふさきるさに

あはれすきみぬれはあまになりぬをとききつけてなみた
をとせはかたはなり人もあはれなりあたら御みをなといふ
われなからもひたひかみをかいさくりてあえなくこころほ

そくてをりくことにえねんせすくやしきことおほかへか
めるに佛もなかくこころつきなしとみ給ぬへしにこりに
しまぬ程よりもとあるはこれは人のなりたるにはあらず物か
たり也イ

はちすはのにこりにしまぬこころもてなにかはつゆをた
まとあさむく

よろつのことなたらかにゑんすへきことみしれるさまにほ
のめかしうらむへからんふしをもにくからすかすめなさ
それにつけあはれさりぬへしおほくはわかこころもみるひ
とからをさまりもすへしあまりむけにうちゆるへみはなち
たるもこころやすくらうたきやうにれとをのつからかろき
かたにそをおほえ侍かしつなかなぬのうきたるめしも
けにあえなしさはへらぬことかといへは申將うなつてとこ
ろ

くわんすれはかみをきしひたいにはなれたるをくさるすれはいのちをのぼりたるつなかな
観二見一岸額離二根一草論二命一江頭之繫舟とい
ふことなり

右のむまのかみものねたみのあひたをよひくひきゝれて
(その女たえぬ猶さてもやはとて程すきてはきたるにイ)
ありしなからのこころならばと女しほるに女ことうけもせ

ぬにしはしらしめんのこゝろにてしかあらためんともいはていたくつなひきてみせしあひたいといたうおもひなけきてはかなくなりぬるところ

ひきよせばたゞにはよらてはるこまのつなひきするそなはたゆときく拾遺抄 雜部平貞文

十月はかりに右のむまのかみのかよふをんな又こゝろかはせる人有けりうちよりいつるにこのひとをしもあひくしてその人のもとへおはしたるに月たにやとるすまゐをみすくさんもさすかにておりたるにいけの水に月やとりてきくもみちおもしろきいゑにてあるにふえをとりいてゝならしたるにことをこのをんなしらへあはせたりかけもよしなとちつゝしるといふは

あすかるさいはらなり

さてうへ人とひきとゝむ

へきことのはもなしとよみてあそふをいとしもなきことに思てそれをふしにてたえぬわかき時のこゝろたになをさやうにもていてたることはあやうくたのもしけなく思侍きいまよりのちはましてさのみ思給えるへき御心のまゝにおらはをちぬへきおきの露はひろはゝきえなんとみゆるたまさゝ

のようへのあはれなといふは

いつこにかやとりとらんあさひこかさすやをかへのたまさうへのあられハとらんイ本

なをとこなつにとよみて山となてしをさしをきてちりなたにといふは

ちりをたにすゑしとおもふうゑしよりいとわかぬねしるとこなつのはな古戀部

こしうとの中將のゆふかほのこといひいてゝつれなくてつらしと思ひけるをもしらてあはれたらしとやくなきかと思ひなりけりといふ意は

われはおもふ人はのけひくこれやこのなみたかいそのあはひなるらんいせのあまのあさなゆふなにかつてふあはひのかひのかた思てイ

式部承はんか半になりてはかせのむすめにあひて物かたりするにおとこ／＼しきことはつかひともしければ三史五經三道みち／＼のかたをあきらかにさとりあかさんこそとあるは

三史といふは 史記 漢書 後漢書をいふなり
五經といふ 毛詩 禮記 左傳 周易 尚書をいふなり

三道といふ 紀傳 明經 明法也

うつせみのもと也 イノノケ にかたゝかへに伊與守のもとへわたり給へるに御ともにの人ノそたとのなるいつみにてさけのむあるしもさかなもとむとこゆるきのいそきありくといふは

風俗のうたにたまれといふ歌の事也たまれのこかめをなかにすへてあるしもやさかなまいにさかなもとめてこゆるきのいそにわかめかりあけにや

とうろかけにへ火あかくかゝけなとして御くた物まいれりとはりとはり丁らもいかにそとあるところ

さいはらに乃なかに我なといふ歌なり

うつせみのもとへ源氏入給ていふかたなしと思ひてなくさまなといとあはれや心くるしくあはれとみさらましかはくちをしからましとおほすむけによをしらぬやうにおほえれ給なんつらきうらみられていかくうきこと身のねのさたまらぬ有しなからの身にてかゝる御心はえをみましかはあるましきをたのみにて又みなをしたまふ後世こゝちをもやとある所

わかさなるのちせのやまのゝちにまたあはんかならずけ

ふならずとも

いとかはかりなるうきみの程を思ひはへるにたゝかたく思ひ給らるゝなりよいしまみきとなかけそとあるところはそれをたにおもふことゝてわかやとのみきとないひそ人のきかくに

とりかさねてそねはなかれけるとよみてさうしくちまておくり給てうちとも人さはかしければひにたてゝわかれ給程心ほそくへたつるせきのみとあるところは

あふさかのなをたのみつゝこしかともへたつるせきのつらくもあるかな

めさへあはてそころもへにけるとよみてぬるよなければなともおよはぬ御かきさまとあるところは

戀しさをなにゝつけてかなくさめん
ぬよなけれはゆめにたにみすイ本
ゆめたにみえすぬるよなければ

小君をせめてかたらひ給へはきのかみくたりなとしてをんなとちにとやかなるころゆふやみのみちたとノしきまきれに我くるまにてゐてたてまつる

ゆふやみはみちたとノし月まちて

かへれわかせこそまにもみん
かけをたにイ本

ならひうつせみ

うつせみの御もとへまた入給つるよありきぬおはぬきすて
ききぬ
てはいかくれ給ぬそのきぬはとりていてたまひぬかのもぬ
けをいかにいせほのあまとある所

はつかしやいせほのあまのぬれころも

しほたれたりと人やみるらん

つれなき人もさこそしつむれとあさはかにもあらぬ御けし
きを有しなからの我身ならはといふところ
世の中をイ本

とりかへすものにもかなやわひつゝも

ありしなからのわかみと思はん

ゆふかほ

これみつかちゝ源氏の御めのと

大貳の御めのとのいたくわつらひてあまになりたるかきりにイとふら

はんとて六條なる家をたつねておはしたり御車いるへきか

とはさしたればこれみつめしてまたせ給程みわたさせ給に
いれイ

このいゑのかたはらにあたらしきいゑのはしとみあけわた
やしきイ
してすたれなとすゝしけにかけわたしたるにをかしきひた

いつきのすきかけなとみえてのそくいかなるものとのつ
あまた
とえるならんとやうかはりておほさるれいよりは御車もや
つしてさきもおはせ給はてあるにみいれ程なくものはかな
きすまののさまをあはれにいつこをさしてとおほしなす
ころは

世の中はいつこくをかさしてわかならん

ゆきとまるをそやとゝさたむる

きりかけたつ物にいとあをやかなるかつらの心ちよけには
ひかゝれるにしろきはなのおのれひとりのまゆとゑみ ひらけた
るをちかた人にも申すとおほは

うちわたすをちかた人にも申すわれそのそこのまゆにしろく

さけるはなにのほなそも古今雜部二旋頭歌

みすいしんつゐるてかのしろくさけるなんゆふかほと申す

なほ人めきてあやしのかきねにききさふらふと申すにけに

こいゑたちたるあたりのこのもかものにあやしくとあるは

つくはねのこのもかものにつかははあれと

きみかみかけにますものはなし

源氏これみつめしてむかしれイたるあふきしそくとりよせて御
らんしてひかりそへたるゆふかほのはなとかきたる御らん

してこのあふきのゆくへたつねよとおほせらるればれいのくまなき御心かなと思ながらこのわたりしりたるものにたつねきすればやうめいのすけと申物の家になむ侍をとこはる中へまかりてといふは

楊名介といふ諸國の介のなゝり

源氏の人のなるや

大貳のめのとにあひておほせらるゝ事

なをひさしくたいめんせぬ時には心ほそき心ちするをさらぬわかれはなくもかなといふ所

をいぬればさらぬわかれのありといへはいよゝゝみまくほしき君かな

世中にさらぬわかれのなくもかな

業ひら返

ちよもといのる人なげくとも侍のこのため

こんよもふかき契ちぎりたえずなとよみて長生殿のふるきためしにはゆゝしくはねをかはさんとほひきかへてみろくのよをかね給ゆくさきのたのめいとこちたしといふ所

はねをかはす契のことさきにくはしくあかせり

みろくのよとあるこの世は尺迦牟尼佛しゃがみぶつの御より五十

六億七千萬歳を心をはりて後は彌勒菩薩めろくのしり給へきなりゆくすゑかねてたのみかたさよとよみてかやうのかたなともさるはこゝろもなかりいさよふ月めづにあくかれんといふ所は

やまのはにいさよふ月をいてんかと

まちつゝをるによそふ氣にける

ゆふかほにかたらひくらし給へたて給つらさにあらはさしと思つるものをねたういまたになのり給へいとむくつけしとの給へはあまのこなればとてさすかにうちとけぬさまいとあいたれたりよしこれもわれからなゝりといふ所めい

あまのかるもにすむゝしのわれからと

ねをこそなかめ人よをはイはうらみし

ゆふかほきえ入ぬ右近うこんとふたりゐてこれみつよひにやり給てまつにやゝひさしくみえぬによのあくるひさしさとせをすくす心ちしてとある所は

くろゝまはちとせをすくす心ちして

まつはまことにひさしかりけり

南殿のをにのなにかしの大臣をひやかしけんためしのおほ
しいてらるゝとあるは

貞信公むかしよふけて南殿をとをり給けるに靈物ゆきあ
ひてたちのさやとらぬけしきおほえ給しかれともおくし
給はておほやけのせんしうけ給はりてためにまいるも
のとらふるは

なにもものそたしかにゆるせしからずはあしかりなんとてた
ちをひきぬき給にひきはなちてにけをはりぬることなり大
鏡にこの事あり二條院にて右近三位とのゝらうたうして
(この御あたりさらす) おほしたてさせ給しを思(たまへ)
いつれはいかてよに侍らんすらんいとしも人にとものはか
なけにものゝ給ところ

おもふとていとしも人にむづれけめしかならひてそみね
はこひしき

ゆふへのそらもむつまじきかなとひとりこち給てえさしら
へもきこえすかやうにておはせましかはとむねのみふたか
るにか
のしかまじかりしきぬたのをとおほしいつるも戀しくて
まさになかき夜とうちすんし給といふは

八月九日正長夜 干聲萬聲無了時

源氏いふかほのはなくなりしところにてわか身も(その
のちれいならぬ御けしきにてあるにうつせみのもとへ)か
きたえおとし給はぬも心ほそくいふをければおほしわす
れぬるかと心みんとていかばかりかはおもひわつらふとよ
みてますたはまことにこそときえ給所は

ねぬなはのくるしかるらん君よりも

われそますたのいけるかひなき

きのかみのいをとのもとへ露のかとをなにかけましと
よみてつかはしてほこりかななりしおほしいつるにゝくか
らすなをこりすまにまたもあたなはたちぬへき御心なめり
といへるところは

こりすまにまたもあたなはたちぬへし

人にくからぬよにしすまへは

三わかむらさき

きた山なにかし寺とかやに源氏わらはやましなひにおは
したるにはりまのかみのこなる人あかしのうへのことをも

のかたりにするにそこのみるめもはつかしくとある所^{所イ}

あまのすむそこのみるめもはつかしく

北^{北出にて}いそにおひたるわかめをそつむ

かしこにて僧都の御もとにてむらさきのうへのむはのかたにおはしたるに屏風をうちならし給へはあやしきひかみにやとたとるけはひをきき給て佛の御しるへはくらきに入てもさらにたかふましかなる物をとの給所

縦^{しうみやうにうをみやう}冥^{あふひのうへ}人^{ひと}於^お冥^{みやう}ニとしこれにや

おほいとより御むかへにきんたち人くさいり給て中將ふところなるふえとりいてふきすましたり辨君あふきうならしとよらのてらのにしなるやとうたふ所

さいはらの中にかつらきといふ歌也

とのには女君はひかくれてれいのとみにもいて給はぬに^をおとせち^{とせ}にきこえいたし給へりわつらひ侍しもいか^ととたにおもはせ給はぬもめつらしからぬことなれと^うらめしくときこへ給へとはぬはつらき物にやあらんとの給所

君をいかて思はん人にわすらせて

とはぬはつらき物としらせん

ふちつほの宮わつらひ給ことありてまかりいて給へり王命婦いかたはかりけんとかなのめなることたにうちましり給はさりけむとつらくさへおほゆな^{とら}にことをかはきこへつくし給けんくらふのやまにやとりをほしけなりといふところ

すみそめのくらふの山^人に入^{りつくなり}るは

たとるくそかしるへらなる

むらさきのうゑのもとにあしまになつむふねそえならぬと

よみておなし人をやとことさらおさなくかきてとある所

みな^{ほりえく}といりのたななしをふねこき

かえりをなし人をや戀^{しと思ひし}わたりなん^本

たまもなひかん程そうきたるとよみてわりなきこと^{きこ}ゆるさまのなれたるそすこしつみゆれ^{るイ}されたるなとこえさ^{なぞひきさらんかイ}らんとうちすんし給所

たつぬへし

おほいとのおはしてをんなきみれいのとみにもたいめんし給はす物むつかしく^ちおほえてあつまをすかき^てにひたち^にもたをこそつくれといふ歌をといふ所

ひたちにはたをこそつくれたれをかね
山をこえのおこえきみかあまよきませるや

比田千歌風俗也

むらさきの上

この火をなづけかたらひ給てならひゑなとさま／＼かきて
みせてまつらせ給やかて本にとおほすにやあらんいみし
うをかしけにかきあつめ給へりむさしのといへはかこたれ
ぬとある所

しらねともむさしのてへはかこたれぬ
といへ

よしやさらそはむらさきのゆへ
こ

ならひすゑつむ花

たいふの命婦すゑつむのことかたりいたりあはれのこと
やと心とゝめてとひ給きんをなんつかしきこゑにかたら
ひ人とおもひ給へるなときこゆればみつのともにてはいま
ひとくさやうたてあらんとの給所

みつのともといふは琴詩酒きんこれはいふ也

いまひとくさやうたてあらんとはさけのことなり

琴詩酒友皆抛ニ我ニ雪月花時尤憶ニ君ニ
白居易 易作

ことひきてあそひしをつくり歌をよみてあそひさけをの
みてあそひなとするをみつのともといふ也

すゑつむもにて

ものないひそといはぬためしにとよみてたまたすきはくる
はかりそと

しとの給所

おもはすはおもはすとやはいいひはてぬなそよのなかのた
またすきなる

おなし宮にて八月廿日よひによひすくるまでまたるゝ月の
心もとなきにとある所

したにのみこふれはくるしやまのはにまたるゝ月のあら
はれす如何に
は、本

またその宮にふみをたにといとをしくおほしいてゝゆふつ
かたそ有けるあめふりいてゝ所せくもあるにかさやとりせ
んとたにおほされすやといふ所

御いはらのなににいかゝといふ歌也

すゑつむふるきのかはきぬをき給へりといふこと

ふるきといふは貂てんといふけた物のかはきぬなり

たちはなのきのうつもれたる隨身めしてはらはせ給うらや

みかほにまつのはのおのれをきあかりてさとこほるゝおともなみてすゝゑのとあるところ

わか袖はなにしたつすゑのまつやまかなみこすこゑのこえたゆる
ぬまはなきひき

ひたちの宮にてかとあけわつらひておとらすぬらすあさの袖かなとよみてわかきものはかたちよくさすとうちすんし給所

幼者形不_ニ蔽_ニ老者體無_ニ溫_ニ悲端與_ニ寒氣_ニ入_ニ鼻_ニ

文選第三卷中吟

ひたちの宮より御さうそくしてたてまつらせ給命婦人の御心にしたかはしとて御らんせさせ給てこそはときこゆればひきこめられたらましかはからましそてまきほさん人もなきみにとあるところ

しらつゆはけふはなふりそしろたえの袖まきほさん人もあらなくに

その御返命婦になけ給てみかさの山のおとめをはすてゝとうたひすさみていて給所

たつぬへし

源氏物語釋

又やかてつゝき

さりやとてぬるしるしよとゝうちわひてゆめかとおほゆるとうちすんしていて給

變態續紛リ神也又神也新聲宛轉夢歟非_ニ夢_ニ歟

天神御作

ひたちの宮

御けしきのあらたまらんもゆかしきとの給へはさえつるはるのといふ所

もゝちとりさえつるはるはものゝことにあらたまれともわれそふりゆく

をんな君にはなにへにつけてみする所に御すゝりのかめのみつにかみをぬらしてのこひ給てへいちうかやうにいろとりそへ給所

へいちうか。みろをんな。ことになくよしみせんとてすゝりのかめに水をいれてくしけるを女心えて。そのかめにすみを入たりけるを。しらでれいのやうにかほにしてかへりたるをみて

われにこそつらさを君はみすれとも人にすみつくかほのけしきよ

一三